岐阜新聞真学塾

出題　蛍雪ゼミナール 大垣駅前校・築樋拓真

問題【国語】

下の各文について現代語訳になるように（　　）に語句を入れなさい。

（1）あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。

現代語訳：（　　）に思って、近づいて見ると、筒の中が光っていた。

（2）あやしの身には得がたきものにて

現代語訳：身分の（　　）身には、手に入れにくい物で

豆知識 雑学コラム　古文単語の覚え方

今日は古文単語について、みていきましょう。古文の単語は今とは違う意味で使うことも多いですよね。言葉は時代とともに変化していくため、意味が変化していくものです。しかし、どんな言葉も古文で使われている意味と全く関係ない現代の意味が突然できた訳ではなく、古文の意味と現代文の意味で何かしらの共通点を持っているものです。「あやし」を例に古文単語と現代語の共通点を掘り下げていきましょう。まず、「あやし」という言葉の成り立ちについてです。「あやし」は意外なものを目にしたときに発する「おやっ？」に形容詞を作る「し」がくっついた「おやし」が訛って生まれたものだと言われています。つまり、「あやし」はもともと、「意外なものを見て『おやっ？』と思った」という意味の形容詞なのです。現代語でも「おやっ、あの人は誰だろう？」と感じるときに「あの人はあやしい」と言えますよね。現代語ではこのように「見慣れず、変だ。奇妙だ。疑わしい。信頼できない。」という意味で使いますが、古文ではどうでしょうか。

まず（1）ですが、これは竹取物語で竹取の翁（おじいさん）が光っている竹を見つける場面の一節です。この場面では、翁は「おや、光っている竹があるぞ」と思っているのですが、「見慣れない、奇妙な竹だ」といった悪い印象を持たず、「不思議な竹だ」と思って近づいています。このように、「あやし」は古文の中では悪い印象を持った時でなくても、「意外なものを見て『おやっ？』と思った」ときに「あやし」を使い、現代語に訳すときには「不思議だ」と訳すことがあります。

次に（2）です。この「あやし」はもともとの意味から少し変化してきています。平安時代、文学作品を書いていたのは貴族や僧侶など身分の高い人物たちでした。そして、この時代は、現代では想像できないくらい身分によって生活が異なる時代です。こういう時代だったため、貴族の人たちにとって身分の低い人たちは「おやっ、あの人は誰だろう？」と思ってしまう存在でした。こうしたことから「あやし」には「身分が低い」という意味で使われることもあります。「あやし」＝「身分が低い」と機械的に覚えると「なんでこんな意味になるんだろう？」と首を傾げてしまいますが、しっかり背景を知ると納得できるのではないでしょうか。

単語の意味を覚えるのになかなか苦戦する人も多いかもしれませんが、機械的に覚えるのではなく、「なぜ、こういう意味になるのか？」を理由付けしながら覚えられるといいですね。

【解答】

（1）（不思議）に思って、近づいて見ると、筒の中が光っていた。

（2）身分の（低い）身には、手に入れにくい物で